



2019.11
vol.217

高校学園祭



われらなる慶び

学校長 飯山 等

《「竹」 萩原朔太郎》 光る地面に竹が生え／青竹が生え／地下には竹の根が生え／根がしだいにほそらみ／根の先より繊毛が生え／かすかにけぶる繊毛が生え／かすかにふるえ。／か

たき地面に竹が生え／地上にすどく竹が生え／まっしぐらに竹が生え／凍れる節節りんと／青空のもとに竹が生え／竹 竹 竹が生え。

もう四半世紀以前のことになると思いますが、「お父さん聴いて」と長男が、家人に聴いてもらいなさいという、国語の音読の宿題であったので、本を手にしてやってきました。それが上に紹介した萩原朔太郎の「竹」です。当時、朔太郎のものをすこし読んでいた私は、小学生の教材とされていることに少なからず驚きながら彼の音読を聴きました。長男の声は高く透明で、私が目で追いかけて読んでいた時とは大きく異なる印象を受けました。彼の声が伸びやかで明るい、光に満ちた世界を創造していきます。「まっしぐらに竹が生え」「青空のもとに竹が生え」、彼の透明な声の力を得てそのフレーズが力強くこちらに届けられ、詩中の「青竹」の語が終わり近くの「青空」と響き合って清新な気をいっそう深めます。まさに日々刻々に成長をしているいのち、その声だからこそ、まっすぐさのゆえだと感じ入ったことを思い出します。

『希望は無量大』です！高校学園祭リーフレットの挨拶文の依頼を受けたとき、テーマを訊ねた私に返ってきた言葉です。その言葉のまぶしさに私の時間は一瞬止まりました。オトナになってしまってから、長い歳月が経つ私にはそれほどまぶしすぎるものでした。ややあって、それは大谷がそのような想いを真っ直ぐに言葉にして、共有される場としてはたらいっていることの証しなのだと思い至って、嬉し

く感じられたことでした。そして将来に、自分や世界のことで希望が見えなくなったり、痛みしか感じられないとき、心意を閉塞させることなく、その今をしっかりと見つめ、正面から受容して、「希望は無量大」と自身に喚びかける。その声を、自身の声として聞く、あなたであってほしいと願わずにはいられませんでした。

高校の学園祭、中学の演劇コンクール、そして中高それぞれの体育大会と、すばらしいみんなでした。「大谷われら」のすばらしい発現でした。「校長先生、めっちゃ楽しい」と全身でその喜びを伝えてくれた生徒。私もそのおかげで一気に気持ちを若くして楽しめました。中学の演劇では、学校行事であることを忘れて舞台に吸い込まれて、胸を熱くしている我自身に嬉しく驚きました。体育大会では中高共に、どの種目も皆が真剣で、心から楽しんでいることが伝わってきて嬉しかったです。中学の二人三脚リレーで、先の三団はとっくにゴールをしているのに、懸命にバトンをつなぎ、バンドがほどけてもズルをすることなく、その度にそこで立ち止まり、バンドを締め直して、ゴールでは他の三団も一緒になっての応援と歓喜の声があふれました。高校の体育大会の日、たまたま仕事が休みで、息子さんの忘れ物を持って来て、息子さんの出る競技だけ見て帰ろうと思っておられたお父さんが、皆が真剣にやっていて、なおかつ楽しんでいるように感銘されて、「最後まで観てしまいました。すばらしい生徒さんたちですね」と教頭先生にお話しに來られました。

「ここは／きみがいちばん勇気づけられる場所／そしてきみがいちばん安らぐ場所／きみのクライマックスが大谷からはじまる。」今年の入学案内の劈頭頁に『あしたのきみのために』と題してこのようなメッセージを書きました。そのことが確かに現成し、皆さんの一人ひとりに生きられていることを、皆さんが証明してくれました。ありがとう。